木関連製造業等の種々の職場で働く人とこれらの予備軍である学生とからなっています.

これらの人々に共通の機関誌が学会誌で，土木工学の各専門分野に関する情報提供や研究・技術開発成果の発表の場が土木学会の第Ⅰ～Ⅵ部門の論文集であると考えられます.

従来，論文集は学会の中でも研究・技術開発関係の仕事に従事している人々だけのためのもので，大多数の会員には無関係のものであるという認識が一般的であったようですが，基本的には，論文集は学会活動のバックボーンであるとともに，わが国の土木工学の技術開発の現況を示すものであり，またそうでなければならないと思います.

したがって今後の技術革新の激しい時代においては，論文集の意義がますます大きくなるものと考えられます.

このような時期においては土木事業の実務に直接的に関係が強く，対象読者のきわめて多い第Ⅵ部門の存在意義はますます大きくなると考えられます.

以下に第Ⅵ部門論文集に望むことおよび提案をいくつか述べます.

① 第Ⅵ部門論文集ではその対象領域の論文をとりあげるのはもちろんですが，その領域の周辺部分すなわちⅠ～Ⅴ部門および土木工学と他分野の境界領域にかかわる論文を積極的にとりあげ，画期的な技術革新につながる可能性の大きい境界領域に関する研究・技術を発展させて欲しいと希望します.

一般に既成分野は硬直的な運営になりやすく，新しい分野を開拓しにくいという欠点がありますので，第Ⅵ部門の柔軟な運営に期待したいと思います.

② 建設会社，コンサルタントおよび土木関連製造業の各社の報告書などの中に適当な論文があれば，これを論文集に投稿していただくようにしたらいかがでしょうか.

各会社が競争して投稿するようになれば，技術開発の促進にもつながるのではないでしょうか.

③ 建設工事や製造工場などの現場での工夫や特許などの紹介を土木工学の専門分野別に行えば，実務担当者だけでなく研究者にも有益ではないでしょうか.

④ 建設産業の直面している重要課題，たとえば建設市場の外国企業への開放問題や建設業の労働生産性などについてテーマを設定し，一般の新聞が行っているような読者の投稿を募集して意見を載せるというページを作るのはいかがでしょうか.

⑤ 上記の企画を実施するためには，論文，報告その他の原稿の査読基準を他部門と少し変える必要があると思います.

(筆者・*Shogo KAWAKAMI*, 名古屋大学教授
工学部土木工学科)

読みやすい論文集作りを

日下部　治

第Ⅵ部門論文集のファンの一人としてもう一度既刊の 1～4 号を読み直してみた．やはり読みやすい．不勉強な私は自分の属する第Ⅲ部門の論文さえもすべては読まない．いや，一つ一つの論文を読み通すには，随分と文献をたどってみないと十分理解できないので読めないのである．それに比べ，第Ⅵ部門の論文は，おもしろくとにかく通読できる．ここに第Ⅵ部門の編集の方々の目指した読みやすい論文集作りの努力の成果があらわれているようである．今後ともぜひ続けていただきたいものである.

読みやすさはどこから来ているのだろうと自分なりに考えてみると，おのおのの論文に『物を造り上げる』というストーリーがあるからではないかと思う．もちろん他部門の学術論文も物を造るという目的をもってはいる．しかし，その道は遠く，ひょっとして道はずれているのかもしれない，と第Ⅵ部門の論文を読んで思う．その例を数字でみてみると，この2年間第Ⅵ部門の 1～4 号に用いられたすべての参考文献 446 の中で，370 号を数える土木学会論文報告集の中の論文はわずか6編，1.3% しかない．実際の設計・施工，技術開発の分野に直接的な情報として他部門の論文は使われていないのである．ここに『学会から必要な情報を集めることが出来ない』(No. 361／Ⅵ-3, p. 100) という不満の声を具体的に聞く思いがする．第Ⅵ部門論文集に寄せられる期待は大きい.

第Ⅵ部門論文集には「対談」や「技術サロン」がある．旧来の論文集のイメージでは生まれてこないものだが，これがまたおもしろい．特に No. 367／Ⅵ-4 の技術サロンはいい．2，3 年前の ASCE のジャーナルに，実務経験豊かな著者による海洋開発の論文があった．そ

こでは，著名な学者の式を，この式は使える，これは使えないと，いとも気持ちよく振い分けていたのを思い出す．これは物を造ることに直接タッチされている方々にしかできないことである．そうした資格のある現場技術者の声を技術サロンの場でもっともっと聞かせていただきたいものである．

（筆者・*Osamu KUSAKABE*，宇都宮大学助教授
工学部土木工学科）

3年目を迎えた第VI部門論文集へ望む

黒田勝彦

第VI部門論文集は毎年3月と9月に発行され全会員に無料で配布されているという点では他の論文集に比較して最も多くの会員に読まれているはずであるが，“どうも「論文集」という名前に気後れして中味を見る気がしない”という会員が多いのではなかろうか？　すでに周知のように輸入技術の時代から自前の開発技術の時代に移っている．にもかかわらず多くの土木技術者が組織の中に安住し自前の技術のストックや開発への努力に無関心なのではなかろうか？　土木界では特に個人の技術が評価されるという伝統をもたないゆえに一部のトップ技術者におんぶされて生活の糧を得ていても自責の念にかられることが少ない．したがって，積極的に自己の向上を図らなくても何とか生きていける．しかも，責任をもたされ，日夜血の出るような努力をしている技術者とダッコちゃん技術者と給料はたいして差がないし生活も安定している．こんな状況では「多くの会員のためになる論文集を!!」と智恵を絞ってみてもしょせん「ああ，論文集か！　関係ない！」ということで屑篭へ直行ということになってしまう．

昨年来，たまたま論文集編集委員会の幹事長をおおせつかっていたこともあり，VI部門論文集に関する規程作りに参加し，いろいろの人に多くの意見をお聞きする機会があった．特に，VI部門小委員会の委員長始め各委員の努力と熱意は言葉に書き表わせないほどであり，何とかこの努力の結晶である論文集を一人でも多くの方に読んでいただきたくて，最近ではお会いする人ごとに「第VI部門の論文集をお読み下さい．論文を投稿して下さい！」と勧めている．ところが土木学会論文集には創設以来の伝統があり，各部門に対するイメージも固定化され，横割社会に慣れない多くの会員には，「既設の論文集の横糸の役割を果たすVI部門」といってもなかなか慣じみにくいらしい．また，「論文集は難しくてどうも」と頭から敬遠しているむきも多い．えてして権威は民衆とは無縁の存在であり魅力の対象とはなりにくい．論文集は「論文集としての格式と権威」を備える必要があるかもしれないが，度が過ぎると一般技術者とは無縁の存在になる可能性があり魅力もなくなる．このジレンマと必死に闘っておられるのが第VI部門小委員会であるように思える．とはいえ，多くの技術者の意識を改革し，学会への技術者としての参加意識をもっていただくことが今後の学会全体の努力として必要であり，これはVI部門論文集の内容の検討だけで行える事柄ではない．多くの人の宣伝と啓蒙活動が必要で，時にはテーマを決めた特集論文集（もちろん自由投稿論文を排除せずに）等を企画することなど面白い．また，旅費の問題等もあるかもしれないが，地方で活躍するすぐれた技術者にも編集や企画の仕事に参画できる機会を多く作り，草起こしの努力を継続することも必要と思う．自前の旅費でも参画したいと考えている多くの技術者から「学会参画の意識」を抹殺してはならない．そうすることによって，地方に埋もれている「小さな技術」も掘り起こされ光をあてられるようになるのではなかろうか？

（筆者・*Katsuhiko KURODA*，京都大学助教授
工学部交通土木工学科）

3年目を迎えた第VI部門論文集へ望む

中川博次

新設された第VI部門の論文集を通読して，全会員に親しまれ，活用される論文集を意図して並々ならぬ編集努力が払われた様子がうかがわれ，他部門の論文集とは際立って趣を異にしている．会員の8割以上が実務に携わっている人達であり，それらの会員によって学会が支えられているにもかかわらず，これまで論文集の購読者は15％に満たず，大部分の会員にとって無縁のものと受取られてきた大きな原因として，論文集が主として大学研究者の発